第３節　常盤構内の試掘調査

1　常盤インキュベーションセンター新営に伴う試掘調査

（1）調査の経過

常盤構内にインキュベーションセンター（現： 大学研究推進機構・ 産学公連携センター ビジネス・インキュベーション棟）の新営が確定したことをうけて、平成13年11月12・20～22日に建設予定地の試掘調査を行った[1)]。調査トレンチは建設予定地にＬ字形に近い配置で２ヶ所設定し、南北方向のものをＡトレンチ、東西方向のものをＢトレンチとした。Ａトレンチは東西に幅２ｍ、南北に長さ13.5ｍで計画したが、南から６ｍの地点までを掘削した時点で、現地表面から約1.5ｍの地点で旧建物のコンクリート基礎を検出したものの、深さ約２ｍまで掘り下げても造成土の範囲内にとどまり地山に到達しなかった。このため、南から６ｍの地点より北側では、トレンチ幅を拡張し、深部への掘削を試みた。造成土は予想以上に厚く、現地表面から４ｍ以上で地山上面に到達したが、遺構・遺物は検出できなかった。Ｂトレンチは南北に幅３ｍ、東西に長さ７ｍの調査区である。Ａトレンチ同様に遺構・遺物は検出できなかった。

（２）基本層序（PL. 15）

Ａトレンチでは、現地表下約30㎝までがマサ土の表土、以下約30㎝～3.5ｍが造成土、約3.5～4ｍが水田耕土で、その下が地山となる。地山は、現地表下約4.0～4.3ｍが青灰色粘質土、約4.3～4.5ｍが黄灰色粘質土となる。地山は変成岩質の岩盤風化土である。

Ｂトレンチ北壁の層序は現地表下約50㎝までがマサ土の表土、以下約50㎝～1.7ｍが造成土、約1.7～2.0ｍが黒褐色粘質土の旧表土、約2.0～2.6ｍが地山の黄褐色粘質土で、同層も変成岩質の岩盤風化土である。

（３）小結

今回は、Ａトレンチの水田耕土から近世もしくは近代と考えられる土師質土器・瓦片が出土したが、遺構及び遺物包含層は検出できなかった。常盤構内では、本来の埋蔵

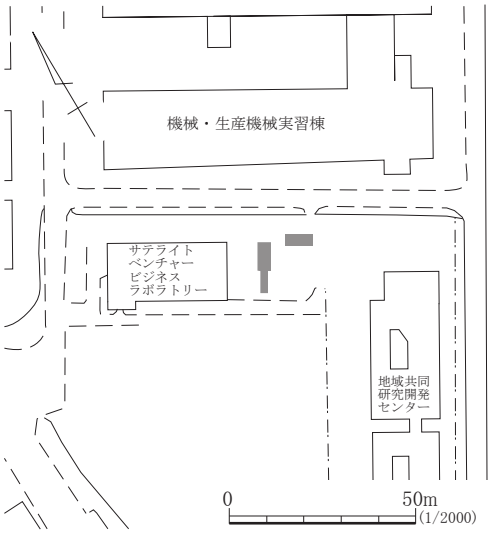


Fig.14　調査区位置図

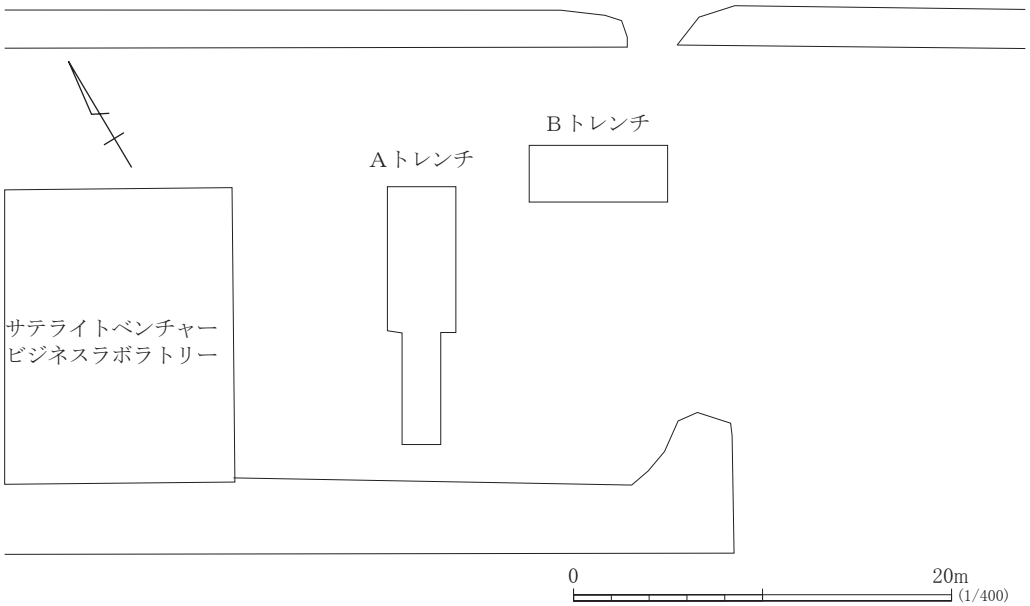


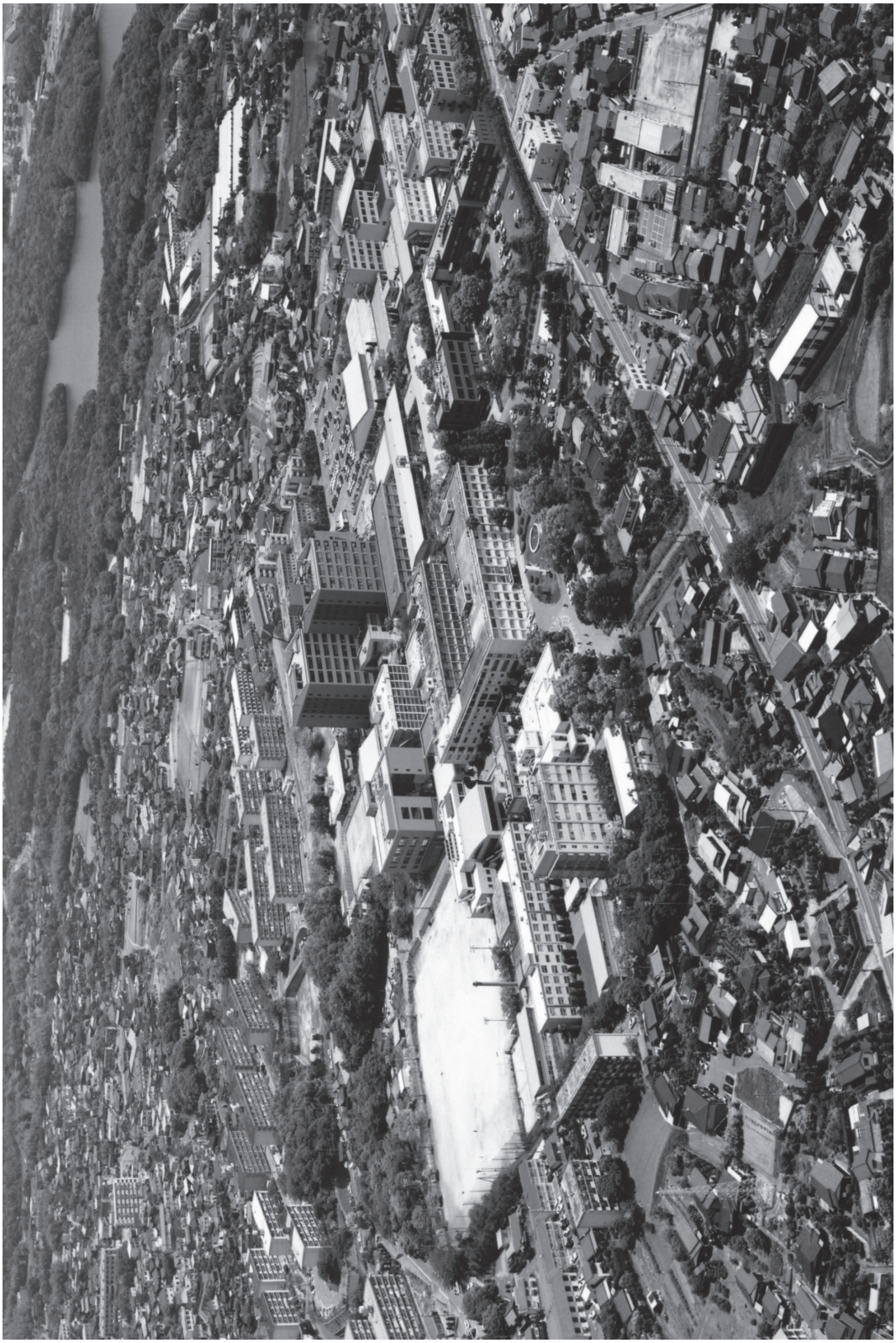
Fig.15 調査区設定位置図

文化財調査の対象となるのは、 大学造成土および旧水田耕作に関連する土層より下位に位置する火山灰質の堆積土層である。しかし、今回の調査地ではこのような堆積土層は全く見られず、すぐに岩盤風化土となっている。しかも、この岩盤風化土の地山もＡトレンチとＢトレンチでは、検出標高に約２ｍの高低差がある。これは、Ｂトレンチ東壁土層の状況から、旧表土が北から南に大きく傾斜していることに起因すると考えられる。

以上から、今回の調査地では、過去の水田開発などに起因する土地改変行為がきわめて激しく、今回の調査地の全域において、埋蔵文化財が存在している可能性はきわめて低いと考えられる。

［注］

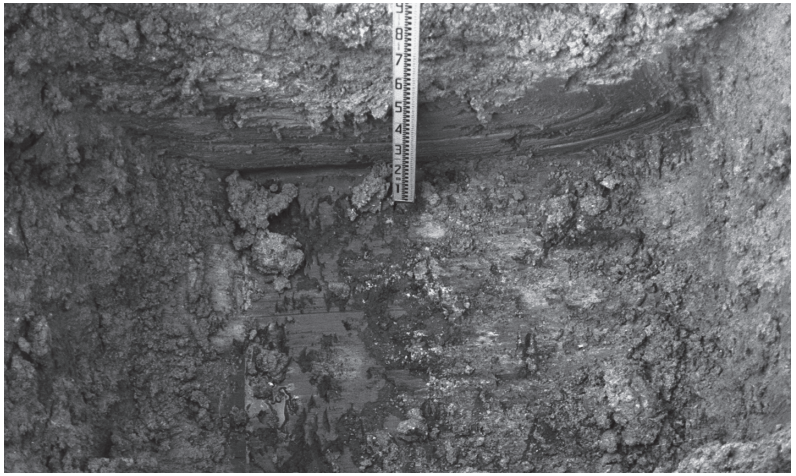
1）本報告は村田裕一「常盤インキュベーションセンター新営に伴う試掘調査」（『平成 14 年 5 月 30 日埋蔵文化財資料館運営委員会資料』、2002 年）を元に田畑が執筆した。



学舎構内全景（西から）

浮島遺跡 大きいモデル ミニ さいたま新都心 埋蔵文化財調査

（1）Aトレンチ北東部（南東から）



（2）Aトレンチ水田耕土上面検出状況（東から）

（3）Bトレンチ全景（南西から）

（4）Bトレンチ東壁土層断面（西から）